

湯沢 賢之助 編

△西村本浮世草子△

御伽比丘尼
殊入

湯沢賢之助編

△西村本浮世草子△

御伽比丘尼
弦入

古典文庫第四六〇冊

昭和六十年一月二十日印刷発行

非売品

編 者 湯澤賢之助

發行者 吉田幸一

印刷者 白橋印刷所

御伽比丘尼

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

古 典 文 庫

813
5
4

御伽比立毛序

ひゆうめりがせは、まつたてぬいとて、いふる
あきよしのめぐれを、すましむじやくしに
かづかぬ、てあわせのへそを、だむゆく
さしのめぐれを、かがむやう。あらわれ
ごかく、がくしのいは、のれどもじてあら
ゆは、さかうて、せうげのまくわら、のほ
すくめぐれを、まづむかがみ、かづひ
あらわす。さうして、まづむかがみ、かづひ

のそよぐ風の匂いを嗅ぎ
さうして左のほうへ進むと
木立の間に、じき、おおむね
一石の大きさの、白い土壇の
上に、まことに、さくらんぼ
の実が、たしか、二三十個
も、さくらんぼの皮を剥いて
、その中の、かわらん、かわらん
の、おでこが、はくはくと、白い
さくらんぼの、おでこが、あつあつ
と、熱い、熱い、熱い、熱い
と、さくらんぼの、おでこが、
あつあつと、熱い、熱い、熱い
と、さくらんぼの、おでこが、

かのよしもとくわい
ひきはらがざく
やまのむかでひる
まじてたぐいに
さうさくくわゆる
かづきすくふる
あらはんあらそく
くわくわくわく
うきうきうきう
とくとくとくと
うくうくうくう
うれうれうれう
うのうのうのう
うとうとうとう

書林
氣乞
けあれ
事は
うら
まく

うて
せふ
ひづ
めぐ

貞享癸卯丁卯

仲義初代

譜下書

馬村嘯松子序

脚

伽比丘尼卷之四緑

一

志賀乃源家 天八代史

二

美代乃源家 度會乃佐

三

わきて梅之助 郡度會

四

女さくらうり わか

卷之二

一

怪石と煙火屋 母の同母

二
うよくちのむのむ

恨みのむ
るいはれのむ

三
恨みのむ
るいはれのむ

怨みのむ
ふらわゆ

四

怨みのむ
ふらわゆ

怨みのむ
ふらわゆ

卷之三

一
春花のまづゆけ

春花のまづゆけ

春花のまづゆけ
春花のまづゆけ

二
春花のまづゆけ

春花のまづゆけ
春花のまづゆけ

三
丸の内はまくらの海
かとねうさぎ
に
かとねうさぎ一ノ宮城

卷之三

一
あでやかのれん
なにわうき

二
やたけの風雨
かみのめ

三
あらわひのくわ
べやうし

四
虚打ばくとう
かうとう

五

卷之五

一

名
前
後
身
火
水
土
金
木

水
火
土
金
木
火
水
土
金
木

二

火
水
土
金
木
火
水
土
金
木

水
火
土
金
木
火
水
土
金
木

三

火
水
土
金
木
火
水
土
金
木

水
火
土
金
木
火
水
土
金
木

四

火
水
土
金
木
火
水
土
金
木

水
火
土
金
木
火
水
土
金
木

周易

御伽比丘尼卷之一

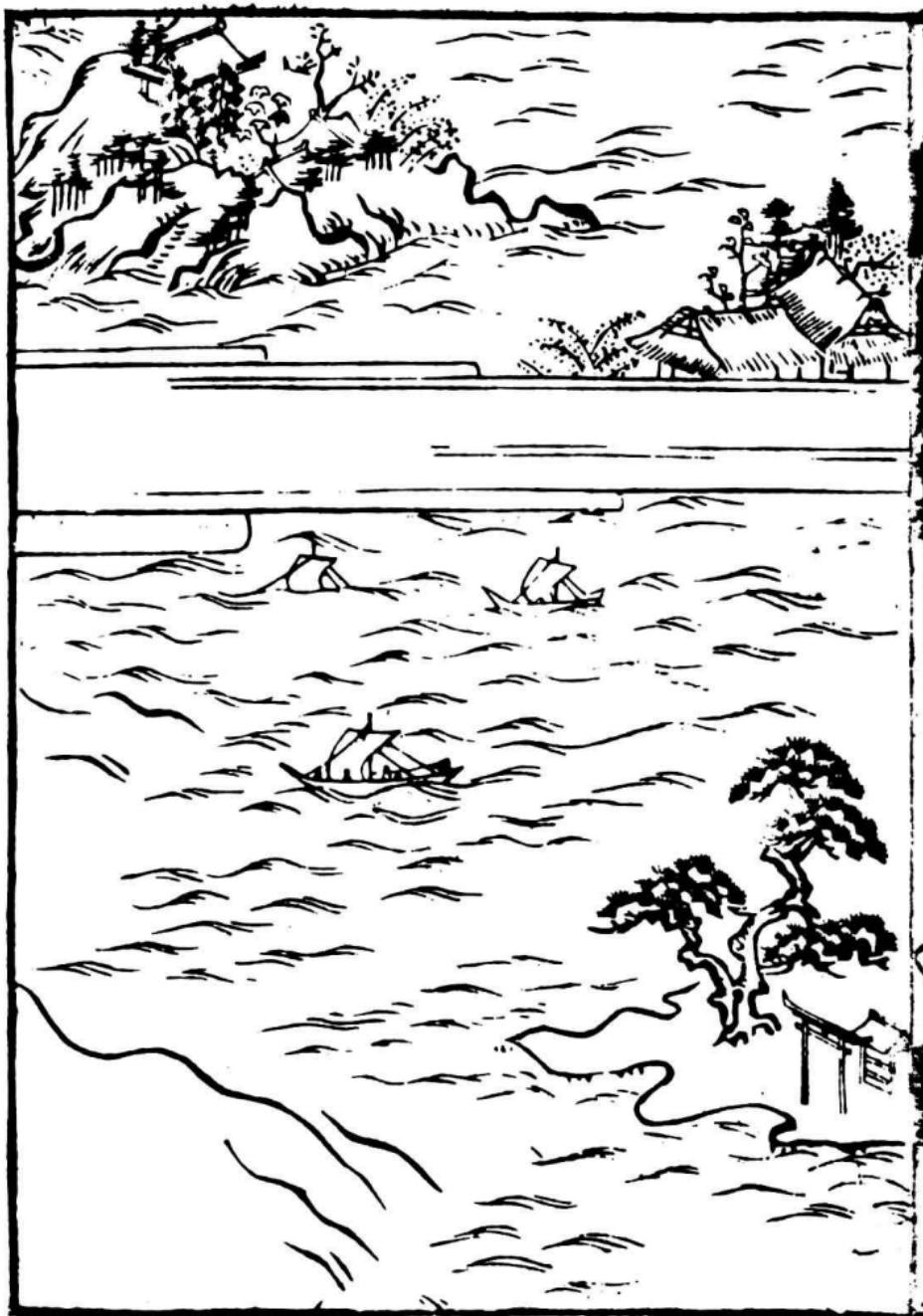
一 志摩乃湯家サリヘバの事

而も勿も事無く、はるか御都へ大和の空港向ひ
珠城のえりにひよそひて、まことに御都より
まわやまとの都へあまん。とくにまつむの
まつむへやまん。まづり。一けはりひ
ばひりに茶の葉をばらちてせざるゝことと
うへりあり。敷とあらふ。おふくろとおとこ
うへり。寒風すゞらえり。やうやうのゆうづく
やが一弓の弓をよみ讀とす。あまくの取れ
げてまくまく法。一歳の二歳をもとす。

西より出でて浦の畠原町の下よ寺橋のまわら
坂はゆき津波回り駕籠へ浦を出でて高麗の
山を越えて江戸へ向ひる。其の間は高麗の
林をくぐりて高麗の山を越えて江戸へ向ひる。
其の間は高麗の山を越えて江戸へ向ひる。
其の間は高麗の山を越えて江戸へ向ひる。
其の間は高麗の山を越えて江戸へ向ひる。
其の間は高麗の山を越えて江戸へ向ひる。
其の間は高麗の山を越えて江戸へ向ひる。
其の間は高麗の山を越えて江戸へ向ひる。

ひだりは清れ國との境の邊ばかりで、あれ
てはうすにあつた。やうすにあつた。まづ
とくらへりへ渡れ。船をもよおひる。まづ
わき側へとすきもひ渡れ。のうのうめぐら
市にまでたら、劫がれがれをひきこむ。
せの中あふぎて、わざわざあらわすら
せんじと、ゆきと、ゆきと、ゆきと、ゆきと
わざわざあらわすらわざわざあらわすら

せんじと、ゆきと、ゆきと、ゆきと、ゆきと
わざわざあらわすらわざわざあらわすら
わざわざあらわすらわざわざあらわすら
わざわざあらわすらわざわざあらわすら
わざわざあらわすらわざわざあらわすら



试读结束：需要全本请在线购买：www.er...